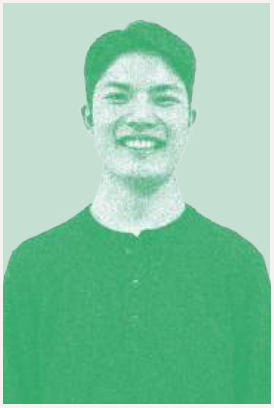
no.1
2026
まちの編集部

テーマ
“いつもと違う視点”って
なんだろう？

マチヘンジン



丸森町

はじめまして、「まちの編集部」です。

高校生とつくる「まちの編集部」。

歩き慣れた道も立ち止まれば違って見える。
ぐるりと見渡せば、小さな発見が顔を出します。

まちを歩き、人に話を聞き、「もしこうだったら」と想像する。

編集とは「何を選び、何を選ばないか」。
丸森町にあるたくさんの魅力の中から、
高校生たちが自分の視点で選び、まとめました。

この一冊が、いつもの暮らしを少しだけ面白くしてくれるかもしれません。

目次

03 センパイ、聞いてもいいですか？
── 高校生のりんが人生の先輩にインタビュー

05 僕の理想の空き家
── まちにある空き家を、僕ならこうする

07 とまって、みつけて。
── ちょっとだけ「違う目」を持って歩く

09 編集後記

高校生りんの センパイ、聞いてもいいですか？

今回のセンパイ
大野美由紀さん

人生のセンパイに興味津々の高校生・りんが、素直に聞きたいことをぶつけていくこの企画。今回は耕野地区出身の大野さん（株式会社伊具緑化）にお話を伺いました。

りん　センパイ、今日はよろしくお願いします！早速なんですが、これまでの経歴を聞いてもいいですか？

大野　今は株式会社伊具緑化という会社の公園管理の事業部で、イベントを企画したりwebで情報発信をしてます。ここに来るまで何度か転職をしているんですが、最初は保育士をしてました。小学生の時に「大野は保育士が合うと思う」と先生に言われてからずっと目指していて。

りん　目指していた職業から、どうして転職を？

大野　楽しく働いていたので、嫌で辞めたわけではなくて。友人が福島で働いていたエステのオーナーとの出会いがあって「この人と一緒に働けたらもっと自分を好きになれるかも」と思って転職しました。美容の業界ですがただ綺麗な人を増やしたいというよりも、心も元気にできたらいいなと思ったんです。エステで10年くらい働いた後は、先輩と独立してお店を始めました。でも、オープンしてすぐに東日本大震災で被害を受けてしまって…。色々な方に助けてもらってお店は再開できたんですが、やっぱり地元に帰りたいと思い丸森に戻ってきました。

りん　丸森に戻ってきてからは何をされていたんですか？

大野　これからを考えながら親戚の農家さんの手伝いをしてました。そしたら、大阪の自動車部品を作る会社が丸森に新しく工場を作る話を耳にしたので「じゃあやってみようかな」と。その会社には事務員として入ったつもりが、気づいたら工場の責任者に（笑）。きっと物足りなかったから、あれもこれもやってみようってなったのかな。そんな時に地元の先輩から商工会青年部を紹介してもらい、町の企業の若い人が集まる青年部に入らせてもらいました。困ったらすぐ相談できる人たちで、電気屋さんや車屋さん、建築屋さん、今働いている会社の社長である阿部さんとも青年部で一緒でした。

りん　色々な方がいて面白そうですね！

大野　すごく面白いんです！青年部の有志メンバーで「まるもりHARENOBAまるしぇ」を始めました。マルシェをやったりするうちに、自分の次にやりたいことが見えてきて、数年前に転職して今勤めている伊具緑化のメンバーになりました。

りん　全部、人との出会いがきっかけなんですね。なんだか大野さんは太陽みたいな感じがしますね。

大野　人との繋がりはとても大切にしています。でも、昔は引っ込み思案だったんです。大人になってから出会った人に「こういうところが素敵だよね」と言ってもらって、自分のままでいいんだって思えるようになってからちょっと変わっていったのかな。

りん　私は高校に進学してから悩んでいることがあって。人との距離感というか、少し相手を気にしすぎてしまうというか…。

大野　そっか…。先に自分を出していくと共通点が見つかって距離が縮まることもあると思います。そして自分を認めてあげることと、自分を信じてあげることが大切かな。あとは、相手の気持ちは相手しか分からないので自分で決めちゃわないこと。自分の相手と仲良くなりたいっていう気持ちを大切にして欲しいです。

りん　センパイ…！最後に一言いただいてもいいですか？

大野　ワクワクしたもん勝ちだと思います。大変でもワクワクする方を選びたい。人生一回きりなので、楽しんだもん勝ち。一緒に楽しもうぜ、という感じです。

りん　私もその「一緒」に入って肩を組んでもらえた感じがしました。ありがとうございました！

大野さんと話して感じたのは、太陽のような人だなと思いました。元々あまり前に出られない性格だった大野さん。自分を信じてくれる人と出会えて変わる事が出来た話を聞き、信じることの大切さに気づきました。また「人との繋がりを大切にする」、「自分を信じてあげる」という言葉が個人的に心に残り、自分への価値観が変わったように感じます。話しているうちにこちらも心を自然と開いて会話する事ができた楽しい時間となりました。

企画担当：佐藤鈴（さとう・りん）
角田高校1年／2009年丸森生まれ。バンドが好きでサカナクションに影響されベースを始めるも3ヶ月で辞めたり、運動を始めるも1ヶ月で辞めるなど、とんでもなく飽き性。花粉のせいでくしゃみが我慢できない事が悩み。

僕の理想の空き家

「もしもこの空き家でなにかするなら？」
と高校生が想像を膨らませました。
何があったら楽しいかな…？

みんなで使える共有スペースがまちにあったらいいな

高校生も大人も、まちの人が交流できるようなスペースで、昔の喫茶店みたいに本があったりして…。のんびり滞在できるような、そんな場所を想像してみました。

話題カードでおしゃべり

テーブルの上には話題カードが置かれていて、たまたま一緒になった人ともすぐにおしゃべりできる仕掛けが。話題を追加できる空のカードもある。
話題例：今日のごはんの予定、最近のアレコレ、好きな季節　など誰でも話せる内容

飲食店のチャレンジショップ

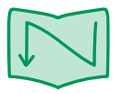
丸森には美味しいご飯屋さんが多いので、何件もまわってもっと楽しめるようなまちになったら…！チャレンジする人は、店内の貼り紙や看板などをデザインして、商店街でもこのお店があると分かるようにする。→デザインコラムへ

モデルになっているのは、丸森地区中心部の商店街にある空き家。稜喜くんが見てすぐに、「おもしろそう！」と想像を膨らませました。空き家の活用は難しい課題ではありますが、高校生のこうした純粋に「こんな風に楽しみたい」という思いがどこかで実現する日が来るかもしれません。（運営）

企画担当：清水稜喜（しみず・いずき）
角田高校2年／2008年白石市生まれ、角田市在住。家が米農家で、一番好きな食べ物は白米。名前の読みが難しいため、よく間違えられる。

縦書きと横書き？

普段使うことの多い横書きですが、ノートや冊子の開き方に注目したことはありますか？一般的には、縦書き＝本や国語の教科書は右に開く「右開き」、横書き＝数学の教科書や左から書き始めるノートは左に開く「左開き」です。この仕組みには、人間の目線の流れが関係しています。読みやすいように、書き方と開き方が組み合わせられています。ぜひお手元の冊子の開き方に注目してみてください。



縦書き・右開き

横書き・左開き

稜喜の気になるデザイン豆知識

デザインに興味があり、高校の探究授業でもデザインをテーマにしている稜喜くん。そんな稜喜くんの気になるデザインの豆知識を少しだけ紹介します。

フォントって？

明朝体やゴシック体など、文字の太さや形、雰囲気が一揃いになった「文字デザインのセット」のこと。大きく分けると日本語のフォントでは「明朝体」と「ゴシック体」という種類があります。漫画では明朝体とゴシック体が混ざって使われています。

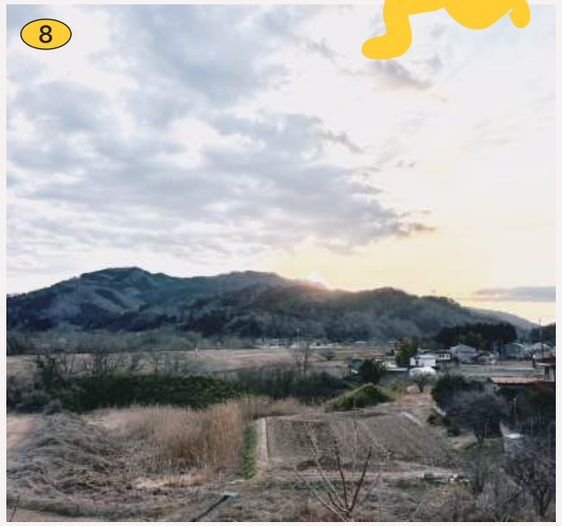
ゴシック体
（フォント名：こぶりなゴシック）
あいうえお

明朝体
（フォント名：ヒラギノ明朝）
あいうえお

とまって、みつけて。

丸森育ちの高校生が丸森町を散歩をしながら見つけた、
自分の景色を紹介します。
普段は通りすぎる景色も、立ち止まると違って見えるかも。

企画担当：佐藤大紀（さとう・たいき）
角田高校2年／趣味で絵を描いたりする。卵が好きで、特に茶碗蒸しが好き。でも卵とじは苦手。13歳くらいに料理しようと思って卵を5個使ったら家族に怒られた。今考えれば当たり前。



1

鳥屋嶺神社
謎めいた雰囲気で、如何にも何かが出そうな場所。ひんやりした空気を味わいたい人におすすめ。

2

鳥屋嶺神社の奥の竹やぶ
神社のさらに奥に行くと竹やぶの道へと出る。心穏やかにしてくれるような竹の合奏が聞こえてくる。

3

鳥屋嶺神社の手水鉢
神社の敷地内にあるひょうたん型の手水鉢。ひょうたん型なのは無病息災や金運向上の縁起物として扱われている。水の中にはお金が入っていた。

4

丸森大橋が見える丸森側の土手
大きな橋が見える場所で何か悩みや考え事がある時におすすめ。幼少期この場所で母親と自転車の練習をした私にとって大事な思い出の場。

5

夜の丸森町
丸森町商工会の方から阿武隈川の方角を見ている写真。いつも見る風景を違う時間に見ると、レトロ感を味わうことができた。

6

商工会の隣の消防団のところにある井戸
井戸があることは知ってはいたが、昔ながらの古い機械もあるとは思わなかった。レトロ感漂うだけではなくレトロだった。

7

舘矢間側から、丸森側の丸森大橋
いつも何気なく通る道。丸森町民は自宅に帰る時に見ることが多い。「いま何度かな？」と気になって温度計を見ちゃう。

8

丸森らしい景色を見ることができる場所
周りを見ると森しかないけど丸森らしい風景。四季が巡る度に色が変わる木々や草たち。夕焼けと被ったら絶景間違いなし。

編集後記

佐藤 鈴（角田高校1年）

今回編集部に参加して、丸森という田舎ならではの人の良さに触れ、自分の中であった田舎というイメージが変わったと感じました。私は「田舎は何もない」という考えを勝手に持っていました。ですがそれは全くもって違く、人の温かさというものが当たり前になっていて気付けていないだけであり、都会より不便な事が多いからこそ人と人とが手を取り合って過ごしている事に気づき、自分の今までの丸森に対する考え方を改めて見つめる事が出来た良い経験となりました。

清水 稜喜（角田高校2年）

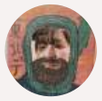
「まちの編集部」に参加する以前から、丸森町の景色や町全体の雰囲気が好きでした。というのも、親の職場が丸森町というのもあってなんとなく身近に感じていたのですが、丸森町の魅力を考えるという際にかなり苦戦したような気がします。参加している方々が僕以外丸森町出身のため町への理解が深く、それに置いていかれないように必死に案を考えました（ほぼ小学生時代に参加したイベントの曖昧な記憶だったのですが）。丸森町出身の方は勿論、僕と同じ角田市出身やその他の市町村の方にも手に取ってほしいものになりました。この冊子を通して丸森町の魅力を知ってもらえたり、自分の住む市町村について考えてみるキッカケになれたら嬉しいです。

佐藤 大紀（角田高校2年）

ただ丸森町で生きているだけではなく、丸森を探究してみるとなかなか見たこともないような物を見つけるのはめちゃ面白かったです。普段車を使って移動する人が多い時代。だからこそ、今の丸森の誰も知らない名所が見つかるのだと思いました。この冊子を見た人も是非違う視点から探して見てほしいです。

佐藤 鈴花（丸森町企画財政課）

本誌は、高校生が自らの視点で町を見つめ直した記録です。企画会議では「町の好きなところ」を出し合い、いわゆる「名所」扱いされない場所まで丁寧に言葉にしていきました。企画会議以外の時間にも紙面の検討を行い、議論を深めていくうちに、企画は次第に自分たちのものとなっていったように思います。町には、普段気に留めない日常の中にも、多くの魅力があります。本誌がその一端を伝える機会となれば幸いです。



横塚 明日美（合同会社nekiwa）

私は車移動をすることがとても多いです。普段、丸森でデザイン事務所をしながら、週3日は山形の大学で教員をしています。丸森に山形に…と車であちこち行くのですが、急いでいると降りて直接景色を見ることがなかなかできません。今回は高校生と一緒に改めて丸森を歩いて観察し、人に話を聞きました。高校生はそんなところに着目するのかと学ばせてもらう場面も多く、まちへの新しい視点を教わった気がします。私が高校生から教わったように、この「まちの編集部」という企画が誰かの新しい変化のきっかけになったらとても嬉しいです。

『マチヘンジン』名前の由来

まちの編集部の略称「マチヘン」と、個人や少人数が発行する小冊子を意味する「ジン（zine）」を掛け合わせたタイトルです。

マチヘンジン | no.1 2026

2026年3月

発行_まちの編集部　企画/編集_まちの編集部

事務局_合同会社nekiwa　デザイン_横塚明日美（nekiwa）

「まちの編集部」とは？：丸森町に興味のある高校生が参加し、町内のデザイン事務所が運営している編集部。高校生が「いつもの丸森町」から、自分で観察し発見した「自分だけの丸森町」を作っていくことに取り組み、地域を楽しんだ記録を冊子として発行します。

＊本冊子は、丸森町企画財政課から委託を受けた令和7年度地域貢献組織育成事業の一貫で作成しました。
本業務受託社（責任者）：合同会社nekiwa [mail] hello@nekiwa.com ／ 丸森町企画財政課 [tel] 0224-72-3024